酵素立体構造および反応予測に基づく 尿素窒素のダブルカイネティックアッセイの考察

西矢 芳昭

Consideration of a double kinetic assay for urea nitrogen determination based on enzyme 3D structure and reaction prediction

Yoshiaki Nishiya

Summary An enzymatic kinetic assay for urea nitrogen determination using urease (EC 3.5.1.5) and leucine dehydrogenase (LeuDH, EC 1.4.1.9) is already in widespread use. Because of the extremely high K_m value of LeuDH for ammonium ions, the method has application as an automated double kinetic assay. Here, a closed 3D structure model of LeuDH was constructed by homology modeling, and subsequently compared with the open structure and with other closed forms of amino acid dehydrogenases. As a result, lowered substrate affinity of LeuDH adapted to the assay method was predicted by structural interpretation of the narrowing of the active site entrance of the closed form of LeuDH. Changes to K_m values were also predicted for enzyme-substrate complexes. The excellent suitability of LeuDH for use in diagnostic reagents, and its tolerance for changes in characteristics, were demonstrated by simple simulations of sequential enzyme reactions.

Key words: Urea nitrogen, Double kinetic assay, Leucine dehydrogenase, Structure model, Reaction simulation

I. 緒言

ダブルカイネティックアッセイ(DKA)は、 まず第1試薬と試料中物質との反応時に生じる 吸光度変化速度を測定し、次いで第2試薬を添 加した後に生じる吸光度変化速度との差分か

摂南大学理工学部生命科学科 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8 ら、目的とする成分の量を算定する方法であ る¹⁾。尿素窒素測定の場合、試料中に含まれる アンモニア(アンモニウムイオン)による測定 誤差がしばしば経験されている。この問題の解 決手法として第1試薬でのアンモニア消去があ るが、よりシンプルな手法としてDKAが汎用

Department of Life Science, Faculty of Science and Engineering, Setsunan University, 17-8 Ikedanakamachi, Neyagawa, Osaka 572-8508, Japan

受付日:2018年3月21日 採択日:2018年4月25日 されている。DKAはアンモニアを消去するの ではなく、その量をレートアッセイで測定し主 反応から差し引くことで影響を回避する²⁾。Fig. 1に、尿素窒素のDKAの原理を示す。すなわち、 第1試薬にロイシンデヒドロゲナーゼ(LeuDH) と2-ケトイソカプロン酸(2-KIC)および NADHを使用し、試料中アンモニアとの反応で 生じる紫外部吸光度減少速度を第1反応として 測定する。次に、ウレアーゼを含む第2試薬を 添加後、第2反応として尿素由来のアンモニア と試料中アンモニアの総計を、第1反応と同様 にレートアッセイで測定する。第1反応と第2反 応の差分から、自動分析装置の演算機能により 試料中の尿素窒素量が算定される。

尿素窒素のDKAでは厳密なレートアッセイ を要求するため、追随酵素であるLeuDHのアン モニアに対する親和性が重要なポイントとな る。基質親和性の議論には酵素の立体構造が欠 かせないが、LeuDHは基質の無いオープン構造 が既に決定されている³⁾。しかしながらクロー ズド構造、とりわけアンモニアと反応する LeuDH-NADH-2-KICクローズド構造の情報が 無いため、アッセイに資する構造的議論がなさ れていない。

また、使用酵素の基質親和性に関する情報は、 酵素反応シミュレーションに基づく検査反応予 測へ直接貢献する。これまで、AST検査やクレ アチニン検査などの反応シミュレーションと酵 素機能の改良を関連づける試みが行われてき た^{4).5)}。尿素窒素測定のDKA反応シミュレーシ ョンは、LeuDHの基質親和性に関する機能改変 を考察・デザインする上で、大いに役立つだろ う。

本報では、DKAによる尿素窒素測定に対し、

使用酵素LeuDHのクローズド構造モデルをホモ ロジーモデリングにより構築し、DKA適応性 について考察した。さらに、連鎖一次反応シミ ュレーションにより測定反応を予測し、考察を 深めたので報告する。

Ⅱ. 材料及び方法

1. LeuDH立体構造の構築

LeuDHアミノ酸配列のホモロジーサーチとマ ルチアラインメント、およびホモロジーモデリ ングによるクローズド立体構造モデルの構築 は、ソフトウェアMOE (Chemical Computing Group Inc., Montreal, Canada) を用いて行った。 LeuDHの給源は、すでにオープン構造が解明さ れているLysinibacillus sphaericus (旧名Bacillus *sphaericus*) とした³⁾ (本LeuDHのアミノ酸残基: 364、アミノ酸配列のUniProt ID: O7SIB4、オープ ン構造のPDB ID: 1LEHa)。ホモロジーモデリ ングのベース構造は、Rhodococcus属由来のフ ェニルアラニンデヒドロゲナーゼ (PheDH) の クローズド構造⁶ (PDB ID: 1C1Da) を用いた。 1C1Daの分解能は1.25Å、LeuDHとの相同性は 37.3%であった。ホモロジーモデリングの中間 モデル構造数は100に設定し、最終モデル構造 を道いた。

LeuDHのクローズド構造モデルを改善するた め、エネルギー極小化計算を行い、ラマチャン ドランプロットを見たところ、アウトライアー が1アミノ酸残基のみ確認された。本残基Glu-93は活性中心から離れた反対側にあり、側鎖が 表面に出ているため、活性中心の考察に直接関 係しないと判断した。最終モデル構造の1C1Da とのCα原子位置の平均二乗偏差[root mean

First step: NH ₄ ⁺ + 2-Ketoisocaproate (2-KIC) + NADH
$\frac{\text{Leucine dehydrogenase (LeuDH)}}{\text{Leucine + NAD}^{+} + H_2O}$
Second step: Urea + $2H_2O \xrightarrow{\text{Urease}} 2NH_4^+ + CO_3^{2-}$
NH ₄ ⁺ + 2-Ketoisocaproate (2-KIC) + NADH
Leucine dehydrogenase (LeuDH) → Leucine + NAD ⁺ + H ₂ O

Fig. 1 DKA method for urea nitrogen determination.

square deviation for atomic C α positions; RMSD(C α)] は、1.30Å/344アミノ酸残基と見積もられた。

2. 酵素-基質複合体の作成と比較

LeuDHクローズド構造の酵素 - 基質複合体 は、MOEにて以下の手順にてNADHおよび 2-KICをドッキングすることで作成した。ドッ キングシミュレーションに使用した化合物の分 子構造は、PubChemデータベース(https:// pubchem.ncbi.nlm.nih.gov)より得た。

まず、NADHおよびL-フェニルアラニンの両 リガンドを含む1C1Daとクローズド構造を重ね 合わせた。次に、L-フェニルアラニンと2-KIC をカルボン酸、CαおよびCβにてフィッティ ングし、LeuDH-NADH-2-KIC複合体を作成 した。水素付加および部分電荷割り付けを行い、 エネルギー極小化計算によりクローズド構造を 改良した。本酵素 – 基質複合体の元構造との RMSD(Cα)は、1.03Å/346アミノ酸残基 と見積もられ、構造中にアウトライアーは無か った。

3. DKAのシミュレーション

ウレアーゼおよびLeuDHを用いた尿素窒素の レートアッセイは、マイクロソフトエクセルを 使用してシミュレーションした。具体的には、 ミカエリス-メンテン速度式に基づき、NADH 量の減少を0.1秒毎に計算し、グラフ化した。ア ッセイ条件は、検体液量15 μ L、第1試薬(LeuDH: 6 U/mL, 2-KIC: 3 mM, NADH: 0.2 mM)300 μ L、 第2試薬(ウレアーゼ: 100 U/mL, LeuDH: 14 U/ mL, 2-KIC: 3 mM, NADH: 0.2 mM)100 μ Lとし た^{2),7)}。ウレアーゼの尿素に対する K_m 値、LeuDH のアンモニア、2-KICおよびNADHに対する K_m 値は、それぞれ10.5、100-800、0.31および0.035 mMとした(Toyobo biochemical department/ Enzyme product list, http://www.toyobo-global. com/seihin/xr/enzyme/e_top.html)。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 尿素窒素のDKAとLeuDH立体構造

構築したL. sphaericus由来LeuDH-NADH-2-KICクローズド構造複合体を、L. sphaericus由 来LeuDHオープン構造(1LEHa)と重ね合わせ たところ、RMSD(C α)は4.47Å/346アミ ノ酸残基と大きな値が見積もられた。Fig. 2に 示す通り、LeuDHはクローズド構造への移行で 活性中心を支点とする領域が大きく狭まった。 さらに、各アミノ酸残基のC α 原子についてオ ープン構造とクローズド構造とでRMSDを比較 したところ(Fig. 3)、末端を除いてRMSDが9

以上の残基を6箇所確認した(Glu-21, Ala-89, Asp-90, Gly-141, Ser-142, ならびにSer-168)。こ れらは、いずれもターン構造の頂部に位置して おり、酵素構造が閉じる際の支点を中心とした 最外殻付近に存在すると考えられる。

尿素窒素のDKAにとっては、LeuDHクロー ズド構造のアンモニアに対する親和性が重要で ある。そこで、クローズド構造の活性中心周辺 の表面構造を見たところ、アンモニア分子が触 媒部位に近づくためのエントランスは極めて狭



Fig. 2 Superposition of model structures of the *L.* sphaericus LeuDH. The superposition of open and closed forms, which are colored cyan and magenta, respectively, was performed using the MOE software. NADH and 2-KIC are represented as space-filling structures. Hydrogen, carbon, nitrogen, oxygen, and phosphorus atoms are shown in light grey, dark grey, blue, red, and pink, respectively.



Fig. 3 Distribution of RMSD between open and closed structures. Residues in which RMSD are 9 or more are shown by arrows.



Fig. 4 Comparison of active site surface structures of three closed forms (A: LeuDH, B: PheDH, C: GluDH). Substrates are represented as space-filling structures. Carbon, nitrogen, oxygen, and phosphorus atoms are shown in grey, blue, red, and pink, respectively. The active site entrances are shown by arrows.

いことが分かった (Fig. 4A)。このエントラン スの状態が、本酵素のアンモニアに対する親和 性の低さ^{2).8)} (K_m 値: 200-500 mM)の原因と考え られた。

2. 種々のアミノ酸脱水素酵素クローズド構造 の比較

アンモニア反応性と構造との相関を明らかに するため、LeuDHのクローズド構造を他のアミ ノ酸脱水素酵素のクローズド構造と比較した (Fig. 4)。結果として、エントランスの様子と アンモニア親和性は明確な関連を示した。 *Rhodococcus*属由来PheDHのアンモニアに対す る K_m 値は約47 mM⁶で、そのクローズド構造の エントランスはLeuDHより拡がっていた(Fig. 4B)。一方、牛由来グルタミン酸デヒドロゲナ ーゼ(GluDH)のクローズド構造⁶⁹(PDB ID: 3JD1)のエントランスもLeuDHより拡がりが あったが、PheDHと比較すると狭くなった(Fig. 4C)。牛由来GluDHのアンモニアに対する K_m 値 は3.2-18 mM (Enzyme database BRENDA, http:// www.brenda-enzymes.org) で、PheDHとの比較 ではエントランスの拡がりと親和性とが対応し ない。これは、すでにクローズド構造に結合し ている基質2-オキソグルタル酸がカルボン酸を 2つ有しており、その高いマイナス電荷がプラ ス電荷のアンモニウムイオンに対する親和性向 上に寄与したと考えられる。

3. アンモニア親和性とDKAシミュレーション 「材料及び方法」記載の条件にて作成した DKAシミュレーターを用いて、LeuDHのアン モニアに対するKm値と反応タイムコースとの 関係をシミュレーションした(Fig. 5)。Km値が 100、200、400および800 mMの際のタイムコー スを比較したところ、血清中尿素窒素の基準値 上限(21 mg/dL)に近い20 mg/dL濃度検体の測 定では、 K_m 値の影響は見られなかった(Fig. 5A)。しかしながら、高度上昇値である尿素窒 素60 mg/dL濃度検体の測定では、 K_m 値100およ び200 mMの場合は第2反応(第2試薬添加後の 反応)において良好なタイムコースを得ること ができなかった(Fig. 5B)。一方、第1反応(検 体と第1試薬でのアンモニア測定反応)では、 アンモニア高度上昇検体でも K_m 値の影響が全 く認められなかった(Fig. 5C)。

このように、もしLeuDHのKm値を人為的に 適当な値に変換できれば、DKAの希望する性 能(測定感度やダイナミックレンジなど)への 適合に繋がると考えられる。酵素の立体構造に 基づく変異体のデザインにより、プロテイン・



Fig. 5 Simulation of DKA assays. It was assumed that the assay reagent 1 (300 μ L) and sample (15 μ L) were mixed and incubated at 37°C for 5 min, and then the assay reagent 2 (100 μ L) was added and incubated at 37°C for 5 min. Time courses of the reactions were compared when the K_m values of LeuDH for ammonia were 100-800 mM. The assumed concentrations of urea nitrogen and ammonia in the samples were altered (A: 20 and 0.08 mg/dL, B: 60 and 0.08 mg/dL, C: 20 and 0.24 mg/dL, and D: 60 and 0.24 mg/dL, respectively).

エンジニアリングで臨床検査用酵素の機能を目 的の方向に改変することが可能となりつつあ る。

LeuDHにおいても、本研究にて構築したクロ ーズド構造モデルに基づく最適なアンモニア親 和性を有する変異体のデザインが可能になっ た。例えば、クローズド構造のエントランスを 形成するGlu-114やAsn-183を適当なアミノ酸に 変更することで、エントランスの拡がりが大き く変化しアンモニア親和性の改変に繋がると予 想される(Fig. 6)。本論文で行った臨床検査用 酵素の構造予測と検査反応のシミュレーショ ン、これら両面からの考察は新たな酵素開発の 戦略となり得るだろう。



Fig. 6 Close-up views of the active site regions of LeuDH surface structure. NADH and 2-KIC are represented as space-filling structures. The Glu-114 and Asn-183 residues are represented as ball and stick structures.

文献

- Abe A, Nishimura T, Noma A, and Hamano K: Automated measurement of amylase isoenzymes by a double kinetic assay with "blocked" p-2-chloro-4-nitrophenyl maltopentaoside as substrate and with wheat germ inhibitor. Clin Chem, 37: 1345-1349, 1991.
- 2) Morishita Y, Nakane K, Fukatsu Y, Nakashima N, Tsuji K, Soya Y, Yoneda K, Asano S, and Kawamura Y: Kinetic assay of serum and urine for urea with use of urease and leucine dehydrogenase. Clin Chem, 43: 1932-1936, 1997.
- Baker, PJ, Turnbull, AP, Sedelnikova, SE, Stillman, TJ, and Rice, DW: A role for quaternary structure in the substrate specificity of leucine dehydrogenase. Structure, 3: 693-705, 1995.
- Nishiya, Y and Shimozawa, Y: Properties of *Geobacillus stearothermophilus* malate dehydrogenase used as a diagnostic reagent and its characterization by molecular modeling. Int. J. Anal. Bio-Sci., 4: 21-27, 2016.
- 5) Nishiya, Y, Yamamoto, M, Takemoto, J, Kano, S, and Nakano, S: Monomeric sarcosine oxidase exhibiting high substrate affinity and thermostability. Int. J. Anal. Bio-Sci., 4: 55-62, 2016.
- Brunhuber, NM, Thoden, JB, Blanchard, JS, Vanhooke, JL: *Rhodococcus* L-phenylalanine dehydrogenase: kinetics, mechanism, and structural basis for catalytic specificity. Biochemistry, 39: 9174-9187, 2000.
- 7) 特許第4016296号.
- Ohshima, T, Misono, H, and Soda, K: Properties of crystalline leucine dehydrogenase from *Bacillus sphaericus*. J Biol Chem, 253: 5719-5725, 1978.
- 9) Borgnia, MJ, Banerjee, S, Merk, A, Matthies, D, Bartesaghi, A, Rao, P, Pierson, J, Earl, LA, Falconieri, V, Subramaniam, S, Milne, JL: Using Cryo-EM to Map Small Ligands on Dynamic Metabolic Enzymes: Studies with Glutamate Dehydrogenase. Mol Pharmacol, 89: 645-651, 2016.